

# 中国内陸農村訪問調査報告（3）

内山雅生 祁 建民

The Report of House-to-House Investigation in Rural Community of Inland China (3)

Uchiyama Masao, Qi Jianmin

## 概 要

本稿は、2011年8月に筆者をはじめとする中国農村研究者が中国山西省P県N郷D村と四社五村で実施した聞き取り調査の報告書の一部である。老農民・幹部経験者・村落婦人・農村教師・農民企業家など農村の諸階層から聞き取り調査を行い、1940年前後を起点とする70年間の農村変革の歴史的過程を追跡した。その際に、農民との質問応答録を原則としてそのまま収録することによって、村落社会の多様な面に照明を当て、村民の視点に立った家族史・村落史の再構成を目指した。

キーワード：中国内陸農村，個人史，家族関係，水利史

2011年8月に、筆者をはじめとする中国農村研究者は、2010年8月と12月に引き続き、中国山西省P県N郷D村で聞き取り調査を実施した。また、今回の訪問は、D村の他に、靈石県溝峪灘村（1940年代日本側によって調査を実施された村）と四社五村と呼ばれる地域の民間生活用水組織及び地方政府の水利行政機関を訪問した。四社五村は明代から、1950～70年代の集団化を経て、今もその生活用水（湧き水）の水権により、国家水利機関の管理・介入に抗して、自立的な運用を保っている。

以上の訪問調査は、山西大学中国社会史研究センターの協力を得て、日中両国の共同研究として実施した。日本側の参加者は内山雅生（宇都宮大学教授・代表）、弁納才一（金沢大学教授）、田中比呂志（東京学芸大学教授）、小島泰雄（京都大学教授）、首藤明和（兵庫教育大学准教授）、林幸司（成城大学准教授）、吉田建一郎（大阪経済大学講師）、河野正（東京大学大学院）、佐藤淳平（東京大学

大学院）、古泉達夫（東京大学大学院）と祁建民である。

山西大学側の参加者は行龍（同教授、副学長、中国社会史研究センター長）、郝平（同副教授、中国社会史研究センター執行主任）及び同研究員の常利兵、李嘎、馬維強及び通訳の毛来靈、孫登州、さらに大学院生の張永平、郝丽娟、李保燕、高維娜である。なお、本稿でも『中国内陸農村訪問調査報告（2）』と同様に、プライバシーの保護に配慮して村民の実名の表記は極力避けるようにした。弁納、田中、小島、首藤及び山西大学のメンバーの調査記録は他の刊行物で掲載する予定である。

このプロジェクトは、2010年より5年間の予定で開始された、平成22年度基盤研究（A）（海外学術調査）「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的調査」によって実施している。

## 一、四社五村（義旺村供水ステーション）調査

WBH

訪問日時：2011年8月22日午前

訪問者：調査団全員、霍州市水利局副局長張愛国と水利局供水総ステーション張主任同行  
通訳：祁建民

場所：義旺村供水ステーション

王氏とは2007年12月17日午後に、内山、弁納と祁が義旺村を訪問した時に、会ったことがある。元義旺村村長で、現在義旺村供水ステーションの請負者で、42歳である。今回も親切に対応してくれた。聞き取りの後、村の食堂で調査団全員がご馳走になった。

王：現在供水ステーションのメンバーは4人で、義旺村、劉家庄村、柏木溝村、琵琶園村と孔澗村に供水している。洪洞県側の杏溝村と窑園村もこの水を利用している。今年の春は水不足で、流量は2寸にも足りなかった。その時も、村に定刻で供水した。現在では雨が降って、一日中に供水できる。

この供水ステーションは5つの村に供水している。この小屋の中に1村ずつで5つのバルブがある。水不足の時には、各村に順番に定刻で供水する。大きい村には多く送り、小さい村には少なく送る。その時には各村の水管理者と相談し、釣り合いをとる。

現在村の各世帯には水窖（貯水池）がある。一つの水窖は10数立方の水を貯蔵でき、一世帯の10日間の生活用水量である。現在沙窩村で深さ450メートルの井戸を作る予定である。

水の代金について、義旺村以外の村では、自ららが各村に行って、各世帯の水窖のメーターを見て、代金を徴収する。1立方に1.8元であるが、義旺村では少しでも徴収できない。私はもともとこの村の村長だが、奉仕として水を供給しているが、村の全員が水の代金を払わない。この村はこの水源しか利用し

ない。来年井戸を掘ってから代金を徴収するつもりだ。井戸水を使用したら代金を徴収してもいいはずだ。

現在供水ステーションを請負い、年間2000元を上納している。水利施設と設備のメンテナンス費用は市の水利局より支払われるので、少額のメンテナンス費を自己負担している。

義旺村では水の代金を徴収できない。供水ステーションができる前には、一人あたり年間2元を徴収した。現在、もし義旺村で徴収したら、一人年間1元でも良いだ。2004年以來ずっと徴収できていない。村の幹部と相談しても、郷に協力を求めてもダメだ。去年の冬に送水パイプは凍って割れたので、郷から4000元の修理費を出してもらった。

私は2004年より供水ステーションを請負し、2006～2009年に村長を務めた。当時の書記長は侯国華である。2009年から現在までの村長は楊全紅で、同時期の書記長は李双佑である。郝継紅は1980年代に書記長を務めた。私はもう村長を務めるつもりはない。

この村でカトリックの信者は100～200人くらいだが、プロテスタント信者は何人か分からない。郝JHがカトリックの信者であることは知らない。

今年の四社五村の大祭は杏溝で行う。仇池社では8日間の水はいらない、我々が使用する。溝のメンテナンス工事を昨年に義旺村で行った。その時私は4000元を出した。2004年以降、毎年の祭りに私もお金を出してきた。毎年の溝メンテナンス工事は5つの村によって決めたので、私は負担すべき分を出した。現在仇池社の8日間の水、南李庄の7日の水は、全て我々が使用してきた。毎年の大祭の費用には2、3万元を使うので、私は毎年4000～6000元を出した。南李庄の水は我々が使うので、私は5800元を出した。

義旺村では、崔姓は300くらい、楊姓200くらい、侯姓100くらい、王姓50～60人くらい、合わせて260世帯で、郝姓は1世帯しかない。

毎年の大祭と小祭には、各村の幹部が出席し、私も出席する。会議の場で私は水の代金を徴収しようと提起した。洪洞では1人年に3～5元を払う。会議では彼らは徴収してもいいと言った。しかしいくら払うか分からないので、その額は決められない。引き伸ばして払わない。私も義旺村の人間で、1分（1元の100分の1）払ってもいい。現在年間で私は10000元余りを失った。

この村の人口は1000人余り、出稼ぎをする人は少ない。野菜を栽培し、果樹園を営み、林檎と桃を生産している。運輸業者はいない。運輸業者はここに来て買付をする。林檎1畝の収入は4000～5000元くらい、紅富士を栽培している。零細の耕地でも小麦、トウモロコシを栽培し、自給自足できる。小麦の1畝の生産高は500～600斤くらい。この村の収入は中レベルである。窑園村は全部の畑で野菜を栽培しているので、収入は多い。この村の林檎栽培は1980年からはじまり、県が技術者を派遣して指導した。

吾家は6～7畝の耕地を持ち、小麦しか栽培しない。小麦の栽培では労働力をそんなに費やさない。供水ステーションの仕事は忙しい。毎日3回もここ来て、以前は供水ステーションに住み、現在では村に住んでいる。以前高速道路のサービスエリアに水を供給し、1立方1.5元で、かなり使用量が多いので、年間の収入は2万元ぐらい。現在、サービスエリアは井戸を持っているが、一部はまだ私の水も使うので、年収は2万元ぐらい。

供水ステーションを請負ったのは2004年から。その時私は幹部ではない。請負のために、当時水利局に1万元を払った。

私の家族は現在夫婦と子供が2人いる。2人目の子供の出産に関して罰金を払った。当時は安く、数百元でいいが、現在の罰金は6000～10000元ぐらいだ。私は村で売店（服装、雑貨）を営み、従業員一人を雇い、月給として600元を払っている。

張愛國：供水ステーションの請負者は毎年水利局に両費（高額なメンテナンス費、減価償

却費）を納めると、メンテナンス費の大半は水利局により支給される。納める金額は、毎年水利局が検分し、その収入によって金額を決める。

## 二、山西省P県D村調査

### WBG

訪問日時：8月17日午後

訪問者：祁建民・古泉達矢・内山雅生

訪問場所：WBG自宅

※第3小隊の隊長を30年間勤めた老幹部。昨年8月・12月に引き続き水利関係の質問のために3度目の訪問。相変わらず記憶力はよい。

・灌漑・排水＝昔は、かなり雨が降っても、排水はできた。村の東と西に、南北に流れる2つの「退水渠」があり、村から沙河に排水されていた。渠は、斗渠・農渠・溝渠があった。昔は7246畝も灌漑できた。現在では4000畝しかできない。現在の幹部は排水に無関心だ。問題が起きるのは彼らのせいだ。

排水のことで、郷の幹部にも会ったことはない。現在の灌漑は地下水を利用している。昔は汾河の水を利用していた。問題が起きるのは、灌漑と排水が一体化していないことが原因だ。

・沙河の汚染問題＝龍海の排水が、沙河に流されている。この問題については、誰も管理していない。

今春、村民の侯JLが、県の環境局に提訴したが、何も解決していない。

龍海とは、鶏肉の加工および鶏の餌の製造をする企業だ。鶏を加工した時の排水が流されている。血が混じっていたと言われている。

・アヘン栽培について＝閻錫山時代に、この村ではアヘン販売と吸引が行われていた聞いたことがある。栽培していたという話はない。

・王さんの幹部時代の土質改良＝「控碱渠」を地下1～2mに作り、灌漑渠からの排水を

沙河に流した。沙河は6～7mの深さがある。「農業学大寨」の頃は、上級幹部が村に滞在して工事を指導したが、現在郷の幹部は、「村民自治」と「計画生育」以外は現場に来ない。

・現在のアルカリ土の改良＝「黒礫」を入れて中和している。昔は高いところから低いところに排水する際に、アルカリ土も自然に流れた。現在では各農家が戸別に灌漑をしている。排水と灌漑が一体化していない。1980年代から排水溝の底をコンクリートにした。

現在の農業はコストが高い。灌漑1回に80元。2回するから160元。化学肥料は1袋150元。機械の貸借料が1畝あたり30元。種まきには1畝あたり20元が必要。一部の農家は、トラクターにつける「耙地」(固い土を粉砕する機械)により1畝30元の収益を上げている。「耙地」は整地にも利用している。我が家にもトラクターはある。

## PYL

訪問日時：8月18日午前

訪問者：祁・古泉・内山

訪問場所：PYL 自宅

※当初、「龍海」を提訴したHJLさんを訪問したが、不在のため、近くの幹部経験者として、急遽PYLさんを訪問。66歳、戊年。

・家族＝父はPSL、1975年に他界、30畝を所有した中農。

母はHYY、本村人、本年に他界。妻は、WJL、介休県張郎鎮出身、6年前に他界。

長女は、PXH、41歳、侯郭村に婚家。

次女は、PCH、37歳、本村で婚家。

三女は、PYH、31歳か32歳、西游駕村に婚家。

長男のPWZ30歳の家族と同居。太原で仕入れた洋服を平遥県城で販売する商店を夫婦で経営。

・本人の経歴＝8歳で本村の小学校に入学、6年後卒業して、農業に従事。第5生産隊の保管に従事。1970年より人民公社崩壊まで、

第5隊長に従事。その後第1隊と第5隊が合併した第一村民小組の組長。

・文革時の水利状態＝文革時、農業生産は暫くして以前の状態に戻った。各地域の排水を「総合退水渠」と言われた沙河に集め、汾河に流した。アルカリ土問題は深刻だった。

県の各部署から集まった工作隊が、農業生産指導に来た。汾河の水が少なくなり、溝のメンテナンスをしなくなった。その頃から排水が整備されなくなった。

・現在の農業＝農業はコストがかかる産業。1畝に化学肥料や灌漑を加えると、400元の出費。生産は1000斤とすると、1畝当たり5、600元の利益しかない。従って、男性は建築業や運輸業、さらに出稼ぎに従事し、農業は女性の仕事となる。

出稼ぎは建築業従事者が多い。この村にも「包工隊」がある。新南堡村や侯郭村に大きな「包工隊」がある。村民はバラバラになっている。村民小組の仕事もしたがない。組長を集めるのも放送するしかない。

・村の廟について＝他村では個人企業家が献金して廟を再建している。この村にはそんな金持ちはいない。再建をしようとする呼びかけ人もいない。

・川の汚染＝龍海は鶏肉の洗浄のために、「火碱」を使い、排水しているので、川沿いの草木が全滅した。侯さんの提訴は聞いたことがあるが、自分は知らない。

・王Hさんについて＝文革時の積極分子。道備郷の郷長や高級合作社の社長を歴任した。文革時は貧農協会の主任として他人を批判した。

・アヘン＝閻錫山時代にはアヘン吸飲者が多く、「吸料子」と呼ばれた。この村でのアヘンの栽培はない。県城の東の方で栽培していた。

解放後、「禁毒運動」が起きた。裴さんの母方の祖父は、貧しい農民だったが、大工をしていた。日中戦争中にアヘン中毒となり、凍死した。

・四清運動で批判されたのは＝第5隊長の王

Hが、生産隊の機動糧を多く残したので批判された。

その他は四類分子。第5隊では、侯 PH（閻錫山時代の民兵隊長）、王 L（地主）、王 ZJ（太原で汚職）、王 RG（地主）。工作隊として軍人の袁さんが派遣されてきた。

・現在の生活＝洋服を販売している長男家族と一緒に生活している。自分は農業に従事。10畝の土地にトウモロコシを栽培し、年間5千円の利益。ほとんどを売却し小麦粉を購入している。

息子は嫁と一緒に太原で洋服を仕入れてくる。夫婦二人で経営している。

## JSL

訪問日時：8月18日午後

訪問者：祁・古泉・内山

訪問場所：JSL 自宅

※昨年に引き続いての訪問。昨年の質問の延長。

・四清運動以後＝自分は副書記のまま。主任だった杜 ZS、書記だった王 XW が批判された。

王は階級闘争にあいまいな態度をとり、さらに富農の女性を中農としたことが批判された。

杜は、閻錫山時代に保衛団の団長で、南政村のトウモロコシを盗んだ人を撲殺したが、入党時にその事実を隠したことが批判された。

工作隊は自分を書記に抜擢しようとしたが、書記はやりたくなかったので辞退した。自分は積極分子だったが、運動が起きると書記が批判されるが、副書記なら批判されないからだ。

・文革時の造反派＝太原には紅総と紅緑の二つの造反派がいた。

平遥の造反派は、予備黨員だった王〇〇（漢字表記は蒋本人もわからない）の「総司」と王 JZ の「緑〇〇」があった。革命委員会の

主任は自分だった。造反派は村内では武力闘争はしなかったが、县城の闘争には参加していた。

やがて自分は、副書記のまま、第7生産隊でトラクターの運転手となった。

・その後＝1969年から11年間、村の主任となった。

副主任には本村出身で、太谷農学院の卒業生であった王 YK がなった。王は四人組支持者として「闘私批修」の中心者だったので、文革終了後批判された。自分も王の後ろ盾として責任をとらされた。

王は文革終了後、郷の学区の副主任となった。自分は、西游駕の農機具ステーション長となり、7台のトラクターを管理した。改革開放後、ステーションは個人の請負となったので、退職した。

・王 H さんについて＝彼には閻錫山時代に、衛生部隊の隊長という「歴史問題」があった。解放前は産婆は女性だったが、解放後は医療知識があるものが担当すべきということで、閻錫山時代に知識があった彼が出産を担当した。

解放後2年間郷の秘書官を担当したが、歴史問題は自白していた。58年に副書記となったが、60年代によく農民を殴ったので、平遥県で典型として批判され、党籍も除籍された。ただ貧農協会の積極分子だった。

78年の清查で名誉回復した。

・水利について＝アルカリ土の改良模範村だった汾陽県の買家荘を学ぶ運動があった。「洗・控・沉」が叫ばれた。自分も買家荘に何回も行った。耕地の7割がアルカリ土だった。斗渠は一つで汾河の水を村に引いた。農渠は8個。溝渠は無数にあった。水利については、亡くなった侯 LG が詳しい。

・龍海の排水＝「火碱」が問題。提訴のことは知らない。

・アヘン＝この村にはアヘン吸飲者が多かった。解放後、県は吸飲者と違って、アヘン販売者には厳しい態度だった。侯郭村や新南堡村に販売者がいた。

楊 ZH は、供銷社の会計だったが、アヘン吸飲のため汚職したことが、1957 年に発覚した。労改で会計を担当したが、また汚職し、刑期が 8 年延長された。1957 年からアヘン禁止のキャンペーンが始まり、その後、吸飲者はいない。

## JSL・HYL 夫妻

訪問日時：8 月 19 日午前

訪問者：祁・古泉・内山

訪問場所：JSL 自宅

※ J 夫妻に基督教のことを聞く。

・妻の HYL の両親と経歴＝父は霍 ZW (90 歳で死亡)。

母は李 XQ (74 歳で死亡)、小学校 4 年間通学後、農業に従事。

22 歳で蔣と、劉という女性の紹介で結婚。

・H の入信動機＝文革後 35 歳ごろに、隣人の楊 SQ が聖書を読んでいたのがきっかけに、夫の蔣に内緒で県城の教会に通った。ミサの日に出かけても、夫は忙しく気が付かなかった。

・夫の蔣の入信＝侯 LY に勧められ、3 年前から、毎週水曜日に侯の家に出かけ、集会に参加している。共産党幹部だったので、影響が出ることを心配し、正式に入信できるか検討している。

今年 7 月の洗礼には参加しなかった。来年洗礼を受ける予定だ。基督教とマルクス主義は 70% 一致している。30% の違いとは、唯物論と唯心論。共産党の闘争哲学など。村の共産党員のうち、侯 LY と小学校の教師をしている許 BD が基督教徒。

四清運動の時に天主教徒が暴動を起こした。基督教徒は文革中でも、集会は禁止されていたが、家で聖書を読むことは許されていた。文革が終わったら、信教の自由が獲得できた。天主教徒は、集会はもちろん聖書を読むことも禁じられていた。

※ちょうど隣人の楊さんが訪ねてきたので、インタビューに応じてもらった。

・楊 SQ = 70 歳の女性。

父は楊 SH。

母は李 CM。両親とも解放前からプロテスタント。

平遥の初級中学卒。59 年から小学校の教師を 1 年間務めるが、出産により退職。夫は信仰に関心を示さない。

カソリックはマリア信仰で、基督教とは別の神を信仰している。温首相の秘書もプロテスタントで、侯 LY の家には DVD もある。村では共産党員も入信している。侯 LY は教会の組長だ。副組長の許 BD は小学校の教師で 50 歳だ。

文革時聖書は焼き払われた。その話を聞いた子供たちは学校へ行かなかった。50 年代には県城の教会に行けたが、文革中は集会も許されなかった。ただ聖書を読むことは許されていた。

## MWB

訪問日時：8 月 20 日午前

訪問者：祁・古泉・内山

訪問場所：MWB 自宅

※調査当初からの案内人の一人。67 歳、酉年。インタビュー終了後、M さんの案内で、汚染された汾河と龍海企業を外から視察。

・家族＝父は、馬 CW, 15,6 畝所有していた下層中農。

母は、本村人の侯 CY。

結婚して東堡に移住した兄馬 CY は 4 年前に他界。

P 県城出身の妻梁 XL は 5 年前に他界、子どもなく、五保戸として一人住まい。

36 歳の時に結婚。妻は当初侯郭村で結婚したが、離婚して実家に戻ってきていた。昔からの知り合いだ。

・経歴＝小学校には 3, 4 年通学。欠席することが多かった。12 歳から馬車ひき(趕馬

車)。その後第3生産隊から第4生産隊に移るが、ずっと馬車ひきに従事。

文革中2年間、孝義県柳旺村で月45元の給料で馬車ひきに雇われた。70年代に帰村したが、生産隊長の毛蘭牛と農具をめぐる争い、村を出て、孝義県の廟会で、豆腐販売し、馬車引きもした。馬車引きは4人いた。王中という人がいた。弟の王Dは生産隊の政治隊長だった。生産隊の中で一人共産党員だった。

その後沁源県で馬車ひき、十数年関従事した。帰宅は不定期。だが、1980年に運輸業も請負制となり、馬車ひきをやめ、村に帰り農業に従事した。

ラバ1頭を購入して、村民に雇われて働いた。しかし、妻の病気のためにラバを売却。その後県城の廟会で、夏には涼粉を、冬には豆腐脳（老豆腐）を販売していた。現在も農地を耕している。

・文革時の様子＝二つの派閥が存在。村民の多くは総司を支援。王XR、王ZXが総司を支持していた。

・保衛＝現在5人いる村の保衛の一人。当初は6人、やがて4人、そして5人になった。村から1日1.7元をもらう、年間2,000元の収入のはずだが、昨年は1,000元だけ。五保戸として国から年間2,000元を支給されている。

・アヘン＝昔はアヘン吸飲者が多かった。伯父も吸飲者。50年代には販売者が逮捕された。

・沙河の汚染＝それは龍海公司（会社）のせいだ。（そのあと案内してやる）。

## GCY

訪問日時：8月20日午後

訪問者：祁・古泉・内山

訪問場所：GCY 自宅

※当初、旧幹部を訪問する予定だったが、本人が県城に出かけるので中止となり、食事

中の王さんを急遽訪問。8隊、9隊、4隊の隊長を歴任した80歳の老人。2010年8月に三谷氏が訪問している。

・水利＝生産隊長の時には、トウモロコシの収穫後、水路の整備をした。水路は現在では全て壊れた。尹回ダムの工事をしたことがある。郷からの指示で、10人の社員を連れて働いた。上級からの指示だから抵抗できない。もし抵抗すれば労働点数がへらされた。工事日程や工事内容は決められているの、完成できなければ食糧が減らされる。

水利工事は請負制導入後しばらく続いたが、3年もしないうちに灌漑できなくなった。文革時には、灌漑工事は厳しくさせられた。村の四類分子も溝の掃除をさせられた。水利建設は請負制導入後、3年で無くなった。

・四清運動＝当時は馬車ひきをしていた。政治運動だから農業生産に影響はない。批判された人の名前は覚えていない。隊長や会計はあまり批判されなかった。保管は一般の社員より多くもらっていたので批判された。

・文革の様子＝47歳で生産隊長となった。この村には二つの派閥があったが、対立は激しくなかった。

王家荘では激しい闘争が起きた。武装隊がいた。人民解放軍がP県城に入ると、この村の闘争も静かになり、武装隊も解散した。昔の幹部と違って現在の幹部は、管理が不十分だ。毎日外で飲食している。

・アヘン＝アヘン吸飲者は財産もなくなった。名前は覚えていない。皆すでに亡くなった。解放後厳しくなった。現在では賭博する者が多い。

・土壤改良＝解放後、汾河の水を利用して灌漑した。アルカリ土も改善した。ひまわりの栽培はアルカリ性の減少に良いということはない。土壤改良とは関係ない。